

平成二十年九月一日発行 第十八巻第九号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可
通巻第二〇七号（毎月一日一日発行）

槐

かい

岡井省二創刊

平成 20 年 9 月号



自
縛

高橋将夫

自信とは入道雲のごときもの
夢殿を離れられずにゐる守宮
核心は白玉の中にもありし
口答へしてもにくめぬ罌粟坊主

尺蠖をもとのところへ戻したる

悪人は一人もゐないお花畠

斑猫にわからぬ道のありにけり

金雀枝を活けて流派はなかりけり

「俳句界」巻頭三句より

真鯉きて緋鯉の影となりにけり

黄金蜘蛛うき世に網を張ってをる

蓮の花自縛を解くがごと開く

槐安集

水野恒彦

祝賀
日に月に大白薔薇の開かんと
少年に草笛未来のどこまでも
黴の世にベルリオーズを聴きぬたり
光芒のしづかなるとき蟻地獄
身のうちに闇を抱きし螢狩

延広禎一

萬聖寺志願会
売茶翁のサロンに省二蓮咲ける
宝寿てふ噴井さらさらこの世かな
水神の糸操りか鮎飛べる
でで虫のとろける眠り閻魔堂
清姫の恋斑猫の動かざる



加藤みき

シリウスにしばらく別れ夏祓
蟻地獄羽根をたまはるときを待つ
雨雲の端のにじいろ浦島草
天空へ伸びて伸びてや山蛭よ
日の盛り音の消えたる交差点

石脇みはる

墓いつもの顔の揃ひたる
わだつみの夏越のあとの潮目かな
ジキタリス混乱の脳いかにせむ
半夏生聖天さんに詣でけり
六月の足より冷ゆる雨なりき

中島陽華

通天閣灯ともし頃のひきがへる
遊仙窟筍づくしとなりにけり
つつしみて博多献上夏の夕
歎喜天そこにありたる炎暑かな
背負はれて川渡るかな花ざくろ

竹内悦子

太陽をころがしてゐる白日傘
土を黄に染めて落ちたる枇杷の種
喜寿傘 寿 形状 記憶 更衣
田を植えてひとりの部屋の円舞曲
かみなりやしやもじ持ちたる田の神様かんざあ

栗栖恵通子

白抜きの字幕スーパー梅雨きざす
水音のなんで途切れる道をしへ
余り苗かたまつてをる神の前
地鶏屋の蠅取り紙のまつくろけ
すつぽんの腹に苔ある日の盛り

大島翠木

動きたくなくなりて動きぬ蟾蜍
夜の河鹿つめたうなりし蹠かな
半開きなる鏡掛け額の花
素麵の赤青愛は不器用に
紅四葩揺れても水の暮れざりき

雨村敏子

ゴールして笑顔で外すサングラス
鬼虎魚それほどもなき面構
燃えさしの残つてをりし滝のそば
くちなはの草を滑りし水の照り
ほうたるにひと触れしたるへだたりよ

小形さとる

鮓圧して年端もいかぬ翁なり
ほうたるの永き刹那をたなせつら掌
梅雨茸や眠れば戒名ついてくる
夏葱の匂ひに還り着きにけり
蠅打つて無沙汰に過ぎし月日かな

本多俊子

遠き木の揺れてをりけり氷水
日盛りに糸をあやつる音すなり
夏深し華一文字の刃文かな
箱眼鏡熊野の国を覗きをり
億年の謎ときめくや夏の月

天野きく江

六月や雨降らぬ星輝きぬ
心もて大錦鶏菊に拘りぬ
大空に光跡見たる羽抜鶏
過ぎし日々はちきれさうな花栗に
でで虫の道ひかりをり我が道も

久津見風牛

このままでいい筈はなしねじり花
簾巻くのみに縁板鳴りにけり
片乳房なき人まじる梅雨の寺
蛇の衣またいでをりし敷居かな
あとがきに本心少し夜の墓

近藤喜子

生まれたての蜻蛉ガラスの翹ひらく
葎切の声の三角形なりし
身のすべて涼風となり待つてゐる
ほうたるや手中に銀河系宇宙
行く夏やジャンコクトーの貝の殻

近藤きくえ

格子戸閉ぢ上七軒の薄暑かな
丹田に双手あてをり青芭蕉
麦秋の伊賀上野なり翁の碑
薔薇ひとひら拾ふ男の子の腕かな
夏茱萸にはしりの色の見えぬたる

谷村幸子

青蓮院通りぬけたり茄子の花
沢瀉や家紋のつきし塗の盆
紫陽花や金剛峯寺の石の庭
青葉風サラブレッドが憩ひをり
南禅寺拝してよりの鱧の皮

槐市集

朝日正人

大手毬 小手毬 咲いて 鱗 鱗 かな
夜叉面 や 添ひ 寝の 猫と 夏の 月
少年よ 飛魚^{あぐ}は 闇夜の ペガサスへ
葦間 出づる や 沖天の 牛蛙
青眼の 構へ や 風の 今年 竹

犬塚芳子

昨日 けふ 夕焼こ や け道 祖神 かな
新緑を 飲みほ して みる 陶狸
「あつち 向いて ほしい」 ポンポンドリア 無口なる
牛蛙 ほむらと なりて 鳴き つづく
紫式部 髪の 吹き立 つ 新樹の 間

犬塚李里子

南国の 獅子の 吐く 水虹 となる
夏至光に 旅立ち し 人どの 辺り
モジリアーニの をんなの 頸や 夕風 ぎて
梅花藻 や 光の 鏤絡 まりて
生涯の 余白に しぶく 白雨 かな

井上静子

紅の さす 青灯 鬼に 朝日 かな
男爵の 土の 中なる 力瘤
引く 波と 押す 波あり し 雨燕
草笛の 六脇に 浸みて 淋し かり
玉の 苗法 螺貝の 音 揺らぎ けり



槐集

高橋将夫選

海風を受けて枇杷の実唄ふかな
安城 近藤 公子

こころの弦かき鳴らしたり螢かな
蟬の殻水に浮かべてみたりけり
頭重くあらば蟻の列ながめむと
酢をたらし白の増したる半夏かな
七十路に草矢を受くる歩のゆるみ
洞穴に干満のあり青岬
枚方 中野 京子

うごき出すものいづこも道をしへ
白玉やめぐり合はせの積みかさね
引いてゆく闇に下り立ち半夏生草
瑠璃の声現の闇を裏返す
岡崎 岩月優美子

花栗の香の漂へりヘラクレス
白南風や雲間に覗くキューピット
ゴスペルの余韻薫風纏ひたる
杏熟る桃源郷はまだですか

螢火を曳いてゆきたる末生かな
東京 西村 純太

てのひらの感情線のはたたがみ
繭といふ閑かさにある虚空かな
天牛の鳴くとき天地さかしまに
くびぎとけアダムとエバの青野かな
グリフインの背ナや太虚に夏水仙
奈良 瀬川 公馨

灼熱の黄土ひたすら牛帰る
秋野不矩風
初夏の旅人たびとのつばらつばらかな
旅人 大友麻人
両の手に十五フランのさくらんぼ
オツペケペ梅花卯木のしほたれて
雲の峰睨み飛込台に立つ
守口 柳川 晋

風を切る愉楽を知りし燕の子
那智赤色の浜(千早の浜)
はらからの血色の浜の夏鯨
熊野川二句
素戔烏尊の裔の目鼻や鮎を打つ
鮎かきの串焼を翳して食ひ千切る

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

海風を受けて枇杷の実唄ふかな 近藤 公子
枇杷の実が海からの涼風を受けて、今にも唄いだしそうに揺れている。「歌う」ではなく「唄う」だから、三味線か枇杷の音が聞こえてきそう。

七十路に草矢を受くる歩のゆるみ 中野 京子
草矢に当たってしまうとは、避けられなかった我が歩にゆるみがあったのか……。でも、草矢でよかった。それに、七十代ならまだまだこれから。

瑠璃の声現の闇を裏返す 岩月優美子
大瑠璃の雄は鮮やかな瑠璃色。美しい囀りで鶯、駒鳥とともに日本三鳴鳥の一つとされているとのこと。現実の闇を裏返し、たそこには瑠璃色の世界があるのだろうか。それとも、どこまでも深い闇なのか。

螢火を曳いてゆきたる未生かな 西村 純太
未生はまだ生じないこと。螢火がゆらゆらと目の前を通り過ぎてゆく。まるで生まれようとする何かが、光を放ちながら過ぎ去ってゆくように。

グリフィンの背ナや太虚に夏水仙 瀬川 公馨
「太虚が凝集して気、気が有形に凝集して万物となり、物が分散して太虚に帰る」という。そんな宇宙の根源にある夏水仙は太虚の凝集なのだろうか。グリフィンには鷲の頭部と翼、ライ

オンの胴体を持つ伝説の動物。グリフィンの後ろ姿に太虚を見るのであろうか。

風を切る愉楽を知りし燕の子 柳川 晋
ランナーズハイというのがある。マラソンランナーが苦しみを通りすぎた時に、何ともいえぬ壮快感が湧いてくるという。脳内麻薬物質ともいわれるエンドルフィンというホルモンの作用だそう。燕が飛ぶことは無関係なのだろうか、どうやらこの燕の子、風を切る愉楽を知ったようだ。

夏北斗街の野ねずみ寝ずにをり 竹中 一花
「街の鼠と田舎のねずみ」という寓話を思い出す。寝ないでいる野鼠の眼に映る夏北斗の存在感が印象的。

せせらぎは淵となりゆく谿若葉 近藤 紀子
せせらぎが谷を下って淵となるごく自然な景。若葉が鮮やかに、なにか人生に重なる思いがする。

青芒するつと剥けるゆで玉子 中田 禎子
青芒は抜こうとしてもなかなか抜けない。私など不器用だから、ゆで卵を剥くとき、大抵はちまちまと剥く結果になるが、時としてカパッと気持よく剥けることがある。そんな情景が浮かんでくる。

聖堂の眼窩涼しきされかうべ 富松 寛子
聖堂に飾られた髑髏。どんな生涯を送ったのか。長い時の流れの中で何を見てきたのか。髑髏の虚ろな眼は何も語らないが、でも涼しげに見えたという。